Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-11

話し言葉における接続助詞「たり」の使用傾向についての一考察

陳, 玉

(Citation)
国際文化学,34:26-43

(Issue Date)
2021-03-26

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012640

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012640

話し言葉における接続助詞「たり」の使用傾向についての一考察

A Study on Usage Trends of Conjunctive Particle *tari* in Spoken Japanese

陳　玉
CHEN　Yu

summary

The conjunctive particle *tari* can be used in parallels of two or more, but can also be used singly. It is known that single *tari* has a role of "exemplifying usage" and "non-exemplifying usage". Previous studies have analyzed the meanings and functions of the "non-exemplifying usage" of single *tari*, but actual-use surveys only divide *tari* into single usage and parallel usage based on form. However, there is a high possibility that "non-exemplifying usage" may be confounded with "exemplifying usage", and so it is necessary to further separate them in order to clarify usage trends. Therefore, this study not only separates single usage from parallel usage based on form, but also tries to use meaning to separate "non-exemplifying usage" from "exemplifying usage", and uses the "Meidai Dialogue Corpus" of native Japanese speakers' language to examine usage trends of *tari*.

Furthermore, according to previous research, *tari* is often used in conjunction with *toka* and *shite*. There is a high rate of appearance of *taritoka* in "exemplifying usage", while *tarishite* and *taritokashite* are associated with "non-exemplifying usage". Therefore, this study separates *tari* and *taritoka* and investigates them by their conjugation in order to verify whether the connected form is related to usage.

キーワード
「たり」、例示用法、非例示用法、使用傾向

1 はじめに

接続助詞「たり」の起源はアスペクトを表す助動詞「てあり」であると言われている。その一方で、「し」、「とか」と並んで現代日本語の並列形式としても発達し、2 つ以上の動作

や状態を並列して述べる場合に用いられるとされている。また、「たり」が一つに脱落して、単独でも例示として使用されることがある。ただし、次の辞書の記述から伺えるように、例示を表さない用法にも発達した。『岩波国語辞典・第五版』(1994) では「たり」について、「若い世代では、同類の事物の存在を全く前提とせずに、自己の発言をぼかして「たり」を添える傾向がはなはだしい」と記述している。

つまり、現代日本語の「たり」には、形式的に「たり」が複数並列される並列使用、一つしか用いられない単独使用に分けられる。さらに意味的に分けると、並列使用は例示にあたり、単独使用には例示を表すものと、表さないものがある。この意味的な分類を本研究では「例示用法」と「非例示用法」と称する。以上の分類を次の例で示す（本稿における引用例の下線および文字の太さは筆者によるもの)。

(1) 並列使用：(例示用法) 土曜日はテニスを<u>し**たり**</u>、小説を<u>読ん**だり**</u>、ギターを<u>弾い**たり**</u>して過ごします。(寺村 1991：p221)

(2) 単独使用：(例示用法) 土曜日はテニスを<u>し**たり**</u>します。(作例)

(非例示用法) 土曜日はテニスを<u>し**たり**</u>しますか？ (作例)

このように、単独使用の「たり」の中には並列要素が省略されたのではなく、明言を避けるために用いられる非例示用法がある。陣内 (2006)、日比 (2009) などは非例示を表す「たり」の用法を「ぼかし」あるいは「婉曲」としている。

しかしながら、多くの先行研究では「たり」に非例示用法が存在すると述べているが、使用実態に関する調査では形式における単独と並列のみを分けるものが多かった。だが、単独使用の中には、例示用法だけではなく、非例示用法も入り混じる可能性が高く、「たり」の用法の使用傾向を明らかにするためには、形式的な分類と意味的な分類を合わせてする必要があると考える。なお、「たり」の出現形式が用法に関わることも先行研究によって指摘されている (劉 2011, 山内 2015 など)。そこで、本研究では、「たり」を例示用法と非例示用法に分けて使用傾向を示してから、出現形式と用法の相互関係を検証することを目指す。

以下、まず、第 2 章では、先行研究の指摘をまとめ、改めて問題のありかについて述べる。第 3 章では、本研究に用いた調査資料及び分類の仕方について示す。第 4 章においては、結果と考察を行う。そして最後に第 5 章では、まとめと今後の課題を述べる。

II　先行研究

調査に先立ち、並列使用と単独使用に分けて、先行研究の指摘を確認しておく。また、日本語母語話者の使用実態に関する調査も取り上げる。そのうえで、問題のありかを改めて確認する。

2.1 並列使用

並列表現について、寺村 (1991) から重要な指摘があり、並列の基本的な概念は「セット

（集合)」（以下は「集合」とする）であり、「集合」のメンバーはある種の等質性をもったものとしている。また、「集合」のメンバーをすべて挙げる「全部列挙」と、一部だけ挙げて他にもあることを暗示する 「一部列挙」に分けている。「たり」は「一部列挙」に属するという。

森山（1995）は、寺村（1991）の「一部列挙」という考え方を認めつつ、さらに、複数の場面がある場合に、その一つの場面が「一部列挙」として「たり」で取り上げられると解釈している。そして、「たり」などによる並列は「する」を伴って、複合的な述語となることができると説明し、並列構造事態がさらに大きくまとまって一つの述語となっているという点が特異であり、これを「並列述語構文（[ab] する)」としている。

(3) 大学へ通っているといっても、授業には［来**たり**来なかっ**たり**］する。（森山 1995：p135）

2.2 単独使用

単独使用の「たり」については、辞書『国語辞典・第一版』(1993)、『日本語大辞典・第二版』(1995)、『デジタル大辞泉』(2017)、『大辞林・第四版』(2019) などでは並列使用以外に、単独使用に対して「たり」を 1 つあげて他の同類要素を「暗示」するのみを記述している。日本語記述文法研究会（2011）も、「いくつかの事態の中の一つを例として挙げる」、他の同類を「暗示」する用法を提示している。

一方、ほかの事態が想定できず、「暗示」の意味が消える用法もあることはいつくかの先行研究から伺える。森山（1995,1997)、本多（2007)、大和（2008)、山内（2015）などが挙げられる。

例えば、山内（2015）によると、「たり」の前に「話者の想定（仮想事態含む）や「想定からはずれない事実」が前接する場合は「可能性」(例 4）の意味合いが生じ、「実際に生起した事実で、話者の想定と相反するもの」が前接する場合は「意外性」(例 5）の意味合いが生じるという。

(4) A：やっぱりさ、ひとりじゃさびしいって思うかもね。
B：そう、ね、ずーっと、独身をとおしてても、ね。
A：なんかさ、結婚しないしないって言ってた人が、急に結婚し**たり**するよね。
B：〈笑い〉 うん、うん、うん。（山内 2015：p83）

(5) C：そうね、中学のあれは、もうおっきいから、わけ分かんないね、どこにいるんだが、小学校は割とそばまで行けるけど、中学だとグランドが＃＃＃、3 年でしょ、6 年までいるから小学校は、割とグランドのそばまで行けるけど。中学校なんか、うちの孫かなと思ったら、よその子を応援して**たり**してね〈笑い〉、目の前まで来たら。
D：あ、そう〈笑い〉。（山内 2015：p83）

山内（2015）によれば、例 4 と例 5 は「たり」に前接された行為以外にほかのものも暗示されているとは考えにくい。例 4 の「結婚する」は話し手の想定内の行為事態であり、

「たり」を使うことで「結婚することがある」という「可能性」の意味合いが生じる。例 5 の「よその子を応援していた」は過去に発生した話者の体験で事実であり、その事実は話者の想定「うちの孫を応援していた」とは相反するものであったため、「意外性」が生じる。同時に、「ユーモア」も感じられるという。

また、大和(2008)では、伝達情報上は不必要と思われる文で単独の「たり」を用いることで意外性が表され、対人的配慮効果が生じると主張している。

(6) 参考文献を教えてもらえ**たり**したら嬉しいな。（大和 2008:p120）
(7) ちなみに今日は私の誕生日**だったり**します。プレゼントやメールをくれた方、どうも有り難うございます。（大和 2008:p122）

大和（2008）によると、「たり」を使うことで、例 6 のような依頼の文脈では、話し手は聞き手が依頼を受け入れてもらえる可能性が低いという認識を示している。受け入れてもらえることは想定外のことであり、受け入れてもらえないことは普通であるという。例 7 では、話し手は「今日は私の誕生日」という情報を、自分にとって自明のことは相手にとっては当たり前のことではないと認識して提示している。いずれも対人的配慮効果が感じられるという。

本多（2007）も話し手は自分、または他人の「不都合・受け入れ困難と感じられる事態」を「生起する必然性がないものとあえて認識して提示する」機能があるといい、発話は丁寧ないし控えめになり、「緩衝効果」が生まれると述べている。

(8) 今の話、実は全部うそ**だったり**して（本多 2007:p8）
(9) わからなくてなんとな[く]勘で書いたら、やっぱり間違って**たり**して…（本多 2007:p9）

本多（2007）によると、例 8 は「今の話」を事実として認識している場合は、話し手は「たり」を使ってあえて生起する必然性のないこととして認識して提示することで、相手に与えるショックを和らげる「緩衝効果」が生まれるという。例 9 は自分の失敗などを率直に語ることが話し手にとって抵抗感を感じる可能性が高いため、「たり」を用いることで気持ちを控えめに提示することができるという。

さらに、森山（1995,1997）では単独使用の中には構文的に特徴的なものとして、「冗談のたりして」の用法があると指摘している。

(10) うどんにマヨネーズをかけ**たりして**。（森山 1995：p140）

そして、森山（1997）では、ここでの「冗談」は「極端な異常事態を例示・想定すること」として位置づけられている。また、この「たりして」を「たりした」に変えて、「うどんにマヨネーズをかけたりした」とすると、冗談の言い方にならないとし、冗談の用法としては、「たりして」という形が重要な条件であると述べている。

2.3　日本語母語話者の使用実態

日本語母語話者の使用実態について量的調査を行った先行研究として中俣（2010）、山内（2014）などが挙げられる。

中俣（2010）では、日本語教科書で取り上げられている「～たり～たりする」という形を標準的とする根拠は薄いことを指摘するために、実際の意味は考慮せずに、形式によって「たり」を「P たり Q たりする」「P たり Q たり」「P たり Q」「P たりする」「P たり」という 5 つの文型に分類し、日本語母語話者コーパス [1]を用いてそれぞれの割合を算出している。

表 1　日本語母語話者コーパスに見られた「たり」の文型の割合

ジャンル		P たり Q たりする	P たり Q たり	P たり Q	P たりする	P たり
話し言葉	話し言葉	16%	13%	18%	**46%**	7%
	国会	17%	20%	**35%**	23%	5%
書き言葉	新聞	18%	8%	**60%**	13%	1%
	書籍	**49%**	13%	18%	19%	1%
	白書	32%	3%	**62%**	2%	0%
	Yahoo！	26%	20%	13%	**35%**	6%

（中俣 2010：p104 表 2 を転載）

中俣（2010）によると、日本語教育における「たり」の導入段階では、「～たり～たりする」という形が提示されるのが一般的である。しかし、表 1 を見ると、「P たり Q たりする」という形の使用は必ずしも多くなく、全体としては話し言葉コーパスでは「P たりする」、書き言葉では「P たり Q」が多く、「～たり～たりする」の形を標準的とする根拠は薄いと主張している。また、1 つの例を挙げる場合には「P たりする」が標準的な形という。

山内（2014）では、「たり」「とか」「やら」などの並列機能を持つ助詞の単独使用は、単なる並列使用の省略と考えず、単独使用の機能を詳しく考察する前に、実際のデータ [2]から並列と単独使用の「たり」の使用例を抽出し、書き言葉と話し言葉に分けて出現頻度を比較している。表 2 に山内（2014）の調査結果を示す。

表 2　文体別の単独用法と並列用法の割合

たり	並列使用	単独使用
書き言葉	90.9%	9.1%
話し言葉	19.5%	80.5%

（山田 2014：p35　表 2 を参考に作成）

表 2 から次のことがわかる、書き言葉では、単独使用の「たり」のトークン数 [3]は 9.1%であり、並列使用の「たり」が 90.9%を占めている。一方、話し言葉では、単独使用の「た

り」のトークン数が全体の 80.5%を占め、並列使用の「たり」は 19.5%であった。したがって、書き言葉では並列使用の「たり」が単独使用の「たり」より多く使われるが、話し言葉では単独使用の「たり」が並列使用の「たり」より多く使われ、使用頻度が高いと言える。

以上の二つ調査の共通点として、話し言葉において「たり」が単独使用される傾向がかなり高いことがわかる。それでは、実際に「たり」の非例示用法は話し言葉においてどの程度使われているのだろうか。そのためには、意味による分け方で調査する必要もあると考える。

2.4　問題のありか

並列使用で二つ以上の事柄を列挙するということは、ほかの事態も存在する可能性が含意されている。形式上「たり」が単独で用いられて、一つの事態を挙げてほかを「暗示」する用法は、本質的には並列使用における「一部列挙」の用法と変わらないと言える。しかし、単独用法の「たり」には、「一部列挙」を原点として発達した非例示用法があると考えられる。話し手は、「たり」を用いて他の事態が存在するように話し、そのときの自分の発言を断定的なものとしないようにすることができる。即ち「ぼかし」である。「ぼかし」によって、さまざまな意味合いが生じる。例えば、自分のことをぼかすと謙虚を表す、自分にとって不利益なことをはっきり表現しないようにする意味になる。また、発生の可能性が低いことを挙げると、意外性や冗談などのニュアンスが感じられる。さらに、依頼の場面では、相手がしてくれる可能性が低いことを自ら認識していることを相手に提示することとなり、配慮効果が感じられる。

2.2 節に示したように、非例示の「たり」の意味・用法について、既に多くの先行研究で重要な指摘がなされている。しかし、使用実態に関する先行研究では、「たり」の用法を形式的に分けて調査を行って考察しているものが多かった。だが、「たり」の例示用法と非例示用法の使用傾向を調べるためには、「たり」形式の出現数からだけでは分けることができない。したがって、本研究では、先行研究の指摘を踏まえつつ、並列使用と単独使用のように形式的に分けることだけでなく、意味的に「たり」の非例示用法を例示用法から抽出することを試みる。

また、「たり」が「とか」、「して」と結合した出現形式は用法に関わることがいくつかの先行研究の中で指摘されてきた。話し言葉において、「たり」が「たりとか」の形で一つのユニットとしてよく用いられると言われている。劉（2011）では「この「たり」が「とか」と結びついた場合、両者が同時に同じ例示暗示の機能を果たしているとは考えにくい。なぜなら、「とか」がなくても、文の意味はほとんど変わらないからである（劉 2011：p10）」と言及している。そして、山内（2015）の調査によると、単独の「たり」には例示より「可能性」の意味合いが生じる用例が多かったのに比べ、「たりとか」の場合は例示の機能がより強まるという。そして、2.2 節に示したように、森山（1995,1997）は「たり」の中止形「たりして」は「冗談」の意味合いがあると指摘している。さらに、山内（2015）では、「たりして」だけではなく、「たりとかして」も意外で稀有な事を提示する談話マーカーのように機能し、ユーモアを伴う会話に多用されていたと述べている。

以上のことから、「たりとか」は例示用法に関わり、「たりして／たりとかして」は非例示用法に関係するということが分かる。しかし、上記の先行研究では、ほとんどデータで各形

式の量的分布と用法の関係を検証していない。したがって、本研究では「たり」と「たりとか」に分けて調査し、活用による出現形式の量的分布が用法とどのように関係するのか、それぞれの相互関係を考察する。

III　研究方法

2.4 節で挙げた問題のありかをふまえ、本研究では次のような調査資料と分類方法で分析を行った。

3.1 調査資料

本研究では主にオンライン検索システム中納言を利用して、日本語母語話者話し言葉コーパス『名大会話コーパス』の用例を収集し、分析した。『名大会話コーパス』は 2001 年から 2003 年にかけて約 100 時間、205 万語数の雑談の音声データを持つ話し言葉コーパスである。会話参加者は女性 161 名、男性 37 名、合計 198 名である。年齢は 10 代から 90 代までと幅広く、出身地域もさまざまであるが、20 代の女性と名古屋出身の参加者が最も多い。会話の内容については、雑談が多く、形式、場所、活動などにこだわらず、生活の中で生じるものが多い。

中納言で『名大会話コーパス』における「たり」の総使用例の頻度を算出するため、「短単位検索」で「書字形出現形」として「たり」「だり」を検索した。対象外となるものを除くと、「たり」は 1039 例、「だり」は 49 例、総計 1088 例が得られた。ただし、本研究では以下のような例を除くことにした。

- 「たり」の前後に文字化されておらず、情報が不完全な部分があり、判断しかねる例 (18 例)
- 話し手が自身の発話を言い直している、あるいは聞き手の発話を繰り返している例 (6 例)

この結果、分析対象となった用例数は 1064 例である。

3.2 分類方法

本研究は「たり」の用法を形式的にだけではなく、意味的にも分類するため、寺村 (1991) の「集合」の概念に基づいて、例示用法と非例示用法に分けることを試みる。

本研究では、「たり」のデータを以下のように分けることにする。まず、「集合」の概念がある、もしくは他の要素が想定できるものを例示用法とする。次に、「集合」の概念がなく、他の要素も想定しにくいものを非例示用法とする。このどちらとも言い難いものについては無理に分類せず、いったん分けておき、分析は保留にする。文脈から「集合」の概念を抽出することができるのか否かの判断は主観的になる恐れがあるためである。

本研究では次の手順でまず用例を分類する。各分類の例も下に挙げておく。() 括弧の中に各タイプの典型的な文型を示す。その中のX、Yは要素を表す。

A.　形式的に並列要素が現れるもの

a.　「たり」が 2 つ以上出現するもの。　（X たり Y たり）例 11

b.　「たり」が一つのみ出現し、「たり」以外の並列形式[4]が用いられるもの。　（X たり Y とか）　例 12

c.　「たり」一つのみ出現し、2 つ以上の同質の要素が出現するもの。　（X、Y たり）例 13

B.　形式的に並列要素が現れないもの

d.　文脈に「集合」の概念を表す語句が明示されているもの。　（X たり）例 14

e.　文脈に「集合」の概念を表す語句はないものの、意味的に他の要素が想定できるもの。　（X たり）例 15

f.　文脈に「集合」の概念を表す語句が明示されておらず、意味的にも想定しにくいもの。　（X たり）例 16

g.　e か f か判断できないもの（保留）。　（X たり）例 17

以下の用例を挙げる際には、並列形式にあたる部分を太字にし、並列要素に相当する部分に棒線、集合に相当する部分に網掛けを施して示す。特に言及すべき部分がある場合には、別の種類の下線を用いることもある。

(11) すっごいよくわかるじゃんね。こんな蛍光のラインがガシガシガシって入ったのを全員が着てるから。黄色い蛍光ライン**だったり**、オレンジの蛍光ライン**だったり**、すぐわかるじゃない。（会話 ID：data002、開始位置：21680、発話者：F023　以下同）

(12) それもさあ、なんかさあ、普通さあ、トイレマンてさあ、なんかちょっと年配のおじいさんだ**とか**おばさん**だったり**するじゃん。（data002、149310、F109）

(13) だから、はかまがぴしっとしててね、ほかの人はね、皆もう年寄りだからね、（うん）まあ背広は着てーき**たり**　、（ふーん）あの紋付きなんか着てくる人もいたけどね、年寄りも。（data039、10100、F020）

(14) 浜松のさー、（うん）にー、（うん）日帰り旅行したことがあってー、（うん）永（訂正：中）田島砂丘【ながたじまさきゅう】とか行っ**たり**。（data022、47480、F090）

(15) うーん、あー、あーんまり何か、でも、そうかもねー。（うーん）あんまり意識してなかったっていうか、私、（うん）アメリカにいるときに（うん）何かお世話になった先生、（うん）に、（うん）２人子供がいてー、（うん）１人が何歳だっけー、あっ、それこそ７歳ぐらいだったの。（うん）７歳、９歳だったの。（うん）もう２人とも女の子だったんだけど、（うん、うん）その２人にピアノを教え**たり**とかしてたからー。（あーん、そっか、そっかー）それであんまり抵抗、（ふーん）私は抵抗なかったけど。（そうかー）ほかの人はどう思ったかわかんないけどね。（data016、159680、F28）

(16) えっ、今回フランス行く前って（うん）どっか、行って**たり**とかしました？（data016、39990、F028）

(17) だって、このうちなんかやっぱし、あのー、渋さだってあるだものよ。（何を）おじいさんが村長さんをし**たり**して、立派なうちだもの、この人このうちを捨てるなんてこと

はできないよ。（data076、198630、F79）

例 14 は文脈に「浜松の日帰り旅行」という「集合」の概念を表す語句が明示されており、「中田島砂丘とか行く」は一つの要素として挙げられているため、d タイプに分類した。例 15 は文脈には「集合」の概念の明示はないが、意味的に「ピアノを教える」以外にほかの要素が想定できるため、e タイプに分類した。例 16 はそのような「集合」の概念が明示されておらず、他の要素も想定しにくいため、f タイプに分類した。

上記の a〜e は、例示用法と見なせる。非例示用法には f タイプのみが該当する。

A 型については、並列要素があるものは全て例示用法に属する。ただし、例 18 のように、一見「たり」が並列されているように見えても、取り上げられている要素が同質のメンバーと認められないものについては、a タイプとして見なさない。

(18) まあ、最初、インディアンの研究をやって、（ええ、へえー）認知様式の違いを種族別に比較し**たり**（うん）ということをやっ**たり**してたんですけども。(data024、270840、M029)

B 型については、形式的に「たり」が単独で、他の並列要素もないものだが、意味的には、例示と非例示に分けられる。B 型のうち、d タイプは「集合」の一つの例として認められ、e タイプは他の要素が想定可能であるため、d と e タイプは例示だと考えられる。ただし、例 19 のように、後文は「たり」を用いて、一つの例を挙げて前文「1 週目来てさ、（うん）もうやめちゃったのかもしれない」を補充して説明しているものは、d タイプに準ずるとみなす。この場合、前文は「集合」の性質に近いと考えられるからである。また、例 20 のように、1 つの文の中で「たり」の後に、「いろいろ」「そういう」のような何かをまとめる言葉がきて、他の要素があることを暗示する形式が現れる場合は、e タイプに準ずると見なす。また、例 21 のように、f は特定された個体 1 つの事柄が文脈から特定できたり、対比によって特定のものが想定できたりするので、非例示用法に当たる。

(19) F056：あれ、1 週目来てさ、（うん）もうやめちゃったのかもしれないよ。
F033：うーん、その可能性もあるね。
F056：1 週目来てさ、場所わからんかったらやめちゃっ**たり**とか。私、前期したんだけど。もうわかんないから、いいやと思って。（data3、86730）

(20) F044：私ね、あのー、この春ごろね、あのー、ほら、ず、今まで 1 人で平気だったんだけどね、やっぱり今年になって、あらーこんな年まで生きちゃったなーって、〈笑い〉嫌だなー、早くお迎えきてくれないかなーと思ったとたんにわびしくなっちゃってね。（うんうん）そいで、三度三度 1 人でここでぽつーんとごはん（1 人じゃね）食べるのが（うん）すっごくわびしくなっちゃったの。（うん、うん、うん）あれ、春、ほらみんなよくうつになるってけど本当にうつになりかけたの。それでね、あ、これじゃいけないと思って、それでに、あの、夜だけ 2 階に一緒にしてよって言って、食費払ってね、（ふーん、ふんふん）あのー、食べ、食べ

てるのよ。

F126：お２階もだけどほら、お若い方は遅**かったり**いろいろで大変。(data030、55250)

(21) F128：うん。あなたは安全運転よね。あたしね、さすがに人を乗せたら安全運転だよ。

M018：うん、俺も１人のときは、が一って行くけどさあ。（うん）人乗せたら、人の命預かっちゃったら、いかんじゃんね、（うん）そんなの。まっすぐ？

F128：うん。

M018：逆にその一、何かそう、と、人乗せてとばせ**たり**できる人の気持ちがわからん。（ふんふん）うーん、だって親が悲しむじゃん。（data004、48610）

なお、数え方について、a タイプの「たり」が 2 つ出現しているが、一つのまとまりとして「並列述語構文」になるため、1 回カウントとする。他の「たり」が 1 つ出現しているタイプも 1 回カウントとする。

Ⅳ　結果と考察

第 3 章の方法に基づいて、『名大会話コーパス』についての分析を行った結果を述べておく。全体の出現頻度を示したあと、活用の終止法と接続法に分けて「たり」「たりとか」の出現形式について考察する。

4.1　全体の出現頻度

『名大会話コーパス』から抽出したデータを 3.2 節で定めた分け方に基づいて、7 つのタイプの頻度を以下の表 3 に示す。

表 3　タイプ別の使用頻度

型	タイプ	出現数（割合）	
A	a	181(20.5%)	326 (36.9%)
	b	39（4.4%）	
	c	106(12.0%)	
B	d	117(13.3%)	557 (63.1%)
	e	169(19.1%)	
	f	228(25.8%)	
	g	43(4.9%)	
合計		883(100%)	

まず形式的に見ると、A 型「形式的に並列要素が現れるもの」（a～c）が 36.9%、B 型「形式的に並列要素が現れないもの」（d～g）が 63.1%を占め、A 型と比べて B 型の出現率が高い。つまり、『名大会話コーパス』において「たり」の並列要素が現れない場合が多いと言

える。また、今回のデータにおいても、「たり」が 1 つしか現れないもの（b～g）の出現率は 8 割、「たり」が 2 つ出現しているもの（a）は 2 割に近いことが伺える。すなわち、中俣（2010）、山内（2014）で調査している結果と同じように、並列使用より単独使用の方が圧倒的に多い。

また、タイプ別に観察すると、非例示用法 f タイプは発話において 25.8%で最も多い。次いで多いのは a タイプの 20.5 %である。また、B 型「形式的に並列要素が現れないもの」（d～g）において、非例示用法 f タイプは 4 割程度となっている。

次に、表 4 に、大区分の例示用法と非例示用法に分けて、出現率を整理して示す(保留した g タイプを除く)。

表 4　例示用法と非例示用法による出現率

用法	例示用法	非例示用法	合計
出現数	612	228	840
割合	72.9%	27.1%	100%

用法の観点から見ると、例示用法（a～e）が 612 例で、72.9%を占めている。それに対して、非例示用法（f）は 228 例で、27.1%である。つまり、非例示用法より例示用法の出現率が高い。

表 3 と表 4 の結果をまとめると、話し言葉において、日本語母語話者は並列使用より単独使用、非例示用法より例示用法を多用する傾向がある。ただし、非例示用法の使用頻度は各タイプにおいて 1 位を占め、低いと言えない。

4.3　出現形式による頻度

日本語では動詞や名詞の語形を変化させることで文法的機能を果たす活用がある。「たり」は一般的にサ変動詞「する」と組み合わされ、活用により単文、複文において文の主語、述語、修飾語の成分を担うことができる。

日本語記述文法研究会(2010)は、「活用とは、単語が文中のほかの要素との関係や文法的意味を表し分けるために、単語の中心的な部分である語幹に語尾をつけることによって様々な語形を作り出す現象である。活用によって作り出されるそれぞれの語形を活用形という」と定義する。また、日本語記述文法研究会(2010)によれば、活用形は終止法と接続法に分かれる。動詞の終止法は、そこで文を言い終えるときに使われる活用形であり、「表現モダリティ」の違いによって、断定形[5)]・命令形・意志形に分かれる。接続法はさらに文を続けていくときに使われる活用形であり、連体形、中止形、条件形に分かれる。今回は「たり」、「たりとか」に分けて、終止法と接続法で調査を行う。

『名大会話コーパス』における「たり」の断定形は「たり（とか）する系」の形が最も多く、その他に「たり（とか）ある」「たりできる」「たり（とか）やる」も 7 例見られた。命令形と意志形は見られなかった。そして、森山(1995)で指摘されていたように、「たり」は構文的には名詞句の資格を有しており、名詞述語と同様に「たり」の後ろに直接「句点／だ」となる例も数多く見られた。

そして、日本語記述文法研究会(2010)によれば、中止形には形の違いにより、連用形とテ形がある。今回のデータでは、連用形の例は「たりしながら」「たりとかしながら」の 2 例しかなく、それ以外はテ形の「たりして」「たりしてて」である。「たりする」は「たりする+名詞」などのような連体形と「たりしたら／すれば／すると」のような条件形が出現していた。

表 5 に、断定形について、「たり」「たりとか」に分けた場合の各タイプの頻度を示す。命令形と意志形は見られなかったので、「たり+する系」「たり+無」「たり+する以外の動詞」の断定形のみをまとめた。

〈終止法〉の断定形

- 「する系」:「たり（とか）する」「たり（とか）している」の否定形、過去形、丁寧形を含むもの
- 「無」:「たり」　「たりだ」で終わるもの
- 「する以外」:「たりある」「たりやる」「たりできる」の否定形、過去形、丁寧形を含むもの

表 5　断定形における各タイプによる使用頻度

	たり			たりとか		
	する系	無	する以外	する系	無	する以外
a	75(22.5%)	43(33.6%)	0	7(22.6%)	22(17.3%)	2(66.7%)
b	10(3.0%)	2(1.6%)	0	1(3.2%)	17(13.4%)	0
c	32(9.6%)	16(12.5%)	1(25.0%)	3(9.7%)	20(15.7%)	0
d	34(10.2%)	22(17.2%)	1(25.0%)	1(3.2%)	29(22.8%)	1(33.3%)
e	59(17.7%)	15(11.7%)	0	8(25.8%)	21(16.5%)	0
f	102(30.5%)	23(18.0%)	2(50.0%)	10(32.3%)	16(12.6%)	0
g	22(6.6%)	7(5.5%)	0	1(3.2%)	2(1.6%)	0
総計	334(100.0%)	128(100%)	4(100%)	31(100%)	127(100%)	3(100%)

表 5 の最下行の総計から、「たり」の断定形は「たり+する系」が 334 例で最も多く、「たりとか」の断定形は「たりとか+無」が 127 例で最も多いことがわかる。「たり」は「する」と結合して用いられるのが一般的とされているが、「たりとか」は「する」とあまり結びつかない。また、「たり」と「たりとか」のどちらも、「する以外の動詞」と結びつくものが非常に少ないことも伺える。

非例示用法 f タイプにおいては、「たり」「たりとか」の「する系」はいずれも 3 割を超え、ほかのタイプより占める割合が高いと言える。

次に、表 6 に、接続法について、「たり」と「たりとか」に分けて、中止形・連体形・条件形の各タイプの頻度を示す。

〈接続法〉

- 中止形：「たり（とか）して」（「たり（とか）しながら」、「たりとかしがち」、「たりしても」[6]除く）
- 連体形：「たり（とか）する形+名詞」
- 条件形：「たり（とか）すると」「たり（とか）すれば」「たり（とか）したら」

表 6　接続法における各タイプによる使用頻度

	たり			たりとか		
	中止形	連体形	条件形	中止形	連体形	条件形
a	31(24.0%)	0	5(10.9%)	4(21.1%)	0	0
b	3(2.3%)	0	1(2.2%)	1(5.3%)	0	0
c	12(9.3%)	0	3(6.5%)	2(10.5%)	0	0
d	11(8.5%)	7(43.8%)	7(15.2%)	2(10.5%)	1(50.0%)	1(9.1%)
e	15(11.6%)	4(25.0%)	17(37.0%)	4(21.1%)	00.0%	7(63.6%)
f	53(41.1%)	4(25.0%)	6(13.0%)	6(31.6%)	1(50.0%)	1(9.1%)
g	4(3.1%)	1(6.3%)	7(15.2%)	0	0	2(18.2%)
総計	129(100%)	16(100%)	46(100.0%)	19(100%)	2(100%)	11(100%)

表 6 の最下行の総計から、接続法の場合は「たり」「たりとか」のどちらも中止形の数が多いことがわかる。中止形の出現率は、f タイプにおいて「たり」が 41.1%、「たりとか」が 31.6%と使用頻度の多さが目立つ。そして、連体形については、「たり」は d タイプの出現率が 43.8%で最も高い。「たりとか」では、2 例しか見られなかった。最後に、条件形については、「たり」と「たりとか」がともに e タイプでよく見られた。

さらに、表 7 では、「たり」と「たりとか」に分けて、非例示用法と例示用法を比較した(保留した g タイプを除く)。

表 7　「たり」「たりとか」による例示用法と非例示用法の使用頻度

		例示用法		非例示用法		合計
たり	断定形	310(63.4%)	426 (69.2%)	127(56.7%)	190 (30.8%)	616
	中止形	72（12.4%）		53(23.7%)		
	連体形	11(1.9%)		4(1.8%)		
	条件形	33(5.7%)		6(2.7%)		
たりとか	断定形	132(22.8%)	154 (81.9%)	26(11.6%)	34 (18.1%)	188
	中止形	13(2.2%)		6(2.7%)		
	連体形	1(0.2%)		1(0.4%)		
	条件形	8(1.4%)		1(0.4%)		
総計		580		224		804

表 7 を見ると、全体的に、例示用法と非例示用法のいずれも、断定形の出現率が最も高く、次は中止形が多い。

「たり」は非例示用法において、中止形が 23.7%で例示用法と比べると割合が大きいことがわかる。そのため、先行研究で述べられたように、「たりして」は例示より非例示の機能が強いと言える。

そして、「たりとか」は例示用法において、断定形が 22 .8%で非例示用法と比べて占める割合が大きいことが見られた。さらに、「たりとか」の例示用法の出現率 81.9%は「たり」の 69.2%より高い。したがって、「たりとか」は「たり」より例示の機能がより強いことが検証できた。

最後に、「たりとか」の中止形については、例示用法と非例示用法の出現率の差は 1%未満であり、今回のデータでは、「たりとかして」は非例示用法に関わると言えないのではないか。

それでも、「たりとか」「たりとかして」が非例示用法にも出現する理由として、文脈の他の部分が影響していると考える。例えば、例 22 の「たりとか」の場合は、前に「と思う」が現れた。森山（1992）は、「と思う」を「文末思考動詞」としている。森山（1992）によれば、「と思う」には、個人的な意見など情報内容を、個人的・主観的なものとして敢えて明らかにし、主張を和らげる「主観明示用法」用法がある。ゆえに、ここで「たりとか」を加えた「と思ったりとか」は、自分の主張や意見を更に控えめに言うことができると考えられる。そして、「と思ったりとか」だけではなく、同じ効果がある「と思ったり」の例も『名大会話コーパス』において多く見られた。また、「たりとかして」について、例 23 の場合は、前文に「ウォークマン」のような小さいプレーヤーが提示されているので、文脈から相反する「大きいなもの」以外の要素が暗示されていると考えにくい。

(22) F033：野球場のあれとか、フェンスとか。
F056：絶対ね、みんなねー、もたれるんだって。無意識なんだって、たぶん。
F033：うーん、私、背が低いから見えなかったじゃんね、こうやって乗り出して見てたんだけど。うーん、そうやね、そういえば全員もたれてたような気がする。
F056：私、怖くてもたれへんかった。ちょっと離れてた。＜笑い＞ま、しっかりしてそうだったと言えば、そうなんだけどね。
F033：でも見た目だけというのもあるしね。（ねー）
F056：そうなんだけど、怖いよね。怖いから。何か結構＜笑い＞もろいなと<u>思ったりとか</u>するもんとかあるもんね。あ、意外ともろいんや。（data003、42770）

(23)（F005 は車で聞くため、CD プレーヤーを買うことを話している。）
F004：そうだね、うん。でもさ、F005 さ、こういうの買えばいいんじゃん。ウォークマン。
F005：そう、こういうの欲しいの。
F004：買ったらさ、パッと手軽につなげてさ、（うーん）で、簡単にＣＤからＭＤに落すことできるじゃん。
F005：そうなんだよ。

F004：うん。

F005：だからこういうの欲しいなと思ってたのね。（うーん、うん、うんうん）で、ずっと見てたんだけど、（うんうん）結局ほかの大きなものとか買っ**たりとかして**。＜笑い＞

F004：うーん、そうなんだ。（data023、29720）

また「たりして」について、京（2013）は仮想的事態提示形式の「たりして」の性格に関して、提示されるところの事態はその実現性が非常に低いものであると説明している。そして、京（2013）によると、「連用形+テハ―評価語」形式ではその述語の部分が否定的評価に偏る傾向があり、「たりして＋は」の場合も同様である。それをベースに「たりして」で示される行為・事態も「好ましくない」「起こっては困る」性格を持つという。『名大会話コーパス』において「たりして＋は」の形式は見当たらなかったが、非例示用法の中止形「たりして」は提示される事態に否定的評価を下すものが半分以上を超えている。例えば、例 24 は D の発話を仮想して、D に「ご一緒じゃないんですかとか言われる」ことが起こると困ることから、否定的評価が下されていると考えられる。そして、仮想的事態だけでなく、例 25 のように過去に発生した事態に対する「たりして」の使用例も見られた。同じ過去の事態に対して否定的評価を下している。

(24) M023：留守番電話サービス。

F128：なっとる。

M023：Dね。

F128：D。

F128：出ろ。まさか自宅にかけるわけにはいかんしね。

M023：いないですけどとか。〈笑い〉

F128：え、ご一緒じゃないんですかとか言われちゃっ**たりして**。〈笑い〉

M023：絶対来る。

F128：怖い、怖い。お母さん出んし。出んし。出ようよ。（data005、119490）

(25)（F142 と F052 は研修旅行の時、旅館で食事していたことを話している）

F142：もうさ、ベジアンの人とかいろいろいて、そういうのを全部調整してさ、その食べ物が全部出てるのに、おぜんに。（うん）ベジアンじゃない人がそれ食べちゃったとかさ。（えっ）そういうときもあるんだよ。したら、そしたら、１人余ってる人が、お肉は食べられないって言っているのに、お肉のしか余ってない、空いていないとか。

F052：それはちょっとひどいんじゃない？

F142：うん、こっちの方がいいとかいって、勝手にそれに座って、それで食べちゃった人がい**たりして**。（えー）ちょっと待ってよーみたいな、大変なときもあったし。

F052：難しいなー。（data055、148540）

V　おわりに

本研究では、接続助詞「たり」を取り上げ、調査を行った。「たり」の使用傾向を明らかにするために、本研究は形式だけではなく、意味的に「たり」の非例示用法を例示用法から抽出することを試みた。結果として、各タイプおよび例示用法、非例示用法の使用頻度を示した。また、「たり」の出現形式が用法に関わるかどうかも調査した。

本研究は以下のような結論に至った。まず、『名大会話コーパス』において、非例示用法の「たり」は例示用法の「たり」より出現頻度が低く、3 割程度であった。また、話し言葉においては、例示用法が多く使用されていると考えられる。ただし、非例示用法はタイプによる分類では、順位が 1 位であり、「形式的に並列要素が現れないもの」において 4 割を占めている。また、先行研究で指摘されていたとおり、「たりして」の形式は非例示用法で使われることが多く、「たりとか」の形式は例示用法で使われることが多かった。しかし、「たりとかして」については、例示用法と非例示用法の出現率の差が大きくなかったため、非例示用法に関わるという検証はできなかった。

最後に、今後の課題として、『名大会話コーパス』の会話データが約 20 年前に収集されたデータであり、現在の母語話者の使用傾向データとしては古いかもしれない。また、『名大会話コーパス』の男女、地域、年齢がアンバランスであるため、これらの観点を考慮した調査をするには他の方法を検討する必要がある。

（神戸大学国際文化学研究科博士後期課程）

注

1) 中俣（2010）では、話し言葉のデータとして、『日本語話し言葉コーパス』から 470 例を採取している。書き言葉のデータとして、『現代日本語書き言葉コーパス』からジャンル『書籍』418 例、『白書』443 例、『Yahoo!知恵袋』『 CD-ROM 版毎日新聞』から 479 例を採取している。

2) 山内（2014）では、書き言葉は『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』中の 2001～2005 年新聞記事データを利用している。話し言葉は以下のデータから話者 100 人分を抽出しており、国立国語研究所(2008)『日本語話し言葉コーパス 2004・第 2 版』（14 会話)、宇佐美まゆみ監修(2011)『BTSJ による日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・ 音声）2011 年版』(46 会話)、筆者採集会話データ(2013 年 5 月～6 月)（6 会話）である。

3) 山内（2014）によれば、「トークン数」は「たり」が使用された回数をカウントして示したものである。単独使用では一つの「たり」を「1」 とカウントし、並列使用では二つ以上の「たり」を「1」とカウントしている。

4)並列形式に関して、本研究は中俣（2015）に従い、以下のような助詞成分を担うものを対象とした。並列助詞「と」「や」「か」「とか」「やら」「なり」「だの」「だが」「に」「といい」「にしろ」、並列を表す接続助詞「ば」「し」「て」。ただし、中俣（2015）では対象となる「も」「、」「連用形」を除外した。

5)日本語記述文法研究会編（2010）の「断定形」は文の終止のことを指し、「終止形」という

用語で用いることが多い。ここの「断定形」は一般的な「推量」と対立する「断定」と区別する。

6)「たりしがち」「たりとかしても」が見られなかった。

参照文献

京健治（2013)「現代語に於ける並列助詞「たり」の一用法：仮想的事態提示形式「たりして」」『文獻探究（51)』、pp.30-39

陣内正敬（2006）「ぼかし表現の二面性―近づかない配慮と近づく配慮―」『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所、pp.115-131

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

中俣尚己（2015）『日本語並列助詞の体系』ひつじ書房

中俣尚己（2010）「現代日本語の「たり」の文型―コーパスから見るバリエーション―」『無差』(17)京都外国語学日本語学科

日本語記述文法研究会編（2010）『現代日本語文法 1』くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2011）『現代日本語文法 6 』くろしお出版

日比伊奈穂（2009）「「たり」の用法に関する考察」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究（7）』、pp.17-28

本多啓（2007）「副助詞「たり」の用法」『駿河台大学論叢(33)』、pp.1-18

森山卓郎（1992)「文末思考動詞「思う」をめぐって―文の意味としての主観性・客観性―」『日本語学』11 巻 9 号、pp.105-116

森山卓郎（1995)「並列述語構文考―「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって―」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版

森山卓郎（1997）「うどんにマヨネーズかけたりして―並立の意味」『言語』26 (2)、pp.56-61

山内美穂(2014)「「並列」機能を持つ助詞の談話による働き―「単独」用法に着目して―」杏林大学博士学位申請論文

山内美穂(2015)「会話で単独使用される「たり」―なぜ「たり」で「可能性」や「意外性」が表せるのか―」『日本語教育』162 巻、pp.82-96

大和啓子(2008)「～タリ（スル）」の意外性と配慮効果―依頼文脈における使用を中心に―」『筑波応用言語学研究』

劉暁傑(2011)「ぼかし表現「とか」についての考察」『相愛大学人文科学研究所研究年報(5)』、pp.48－35

辞書

梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明編（1995）『日本語大辞典・第二版』講談社

ジャパンナレッジ lib（2017）『デジタル大辞泉』（http://japanknowledge.com）（最終閲覧日：2019 年 9 月 11 日）

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（1994)『岩波国語辞典・第五版』岩波書店

松村明編（2019）『大辞林・第四版』三省堂
森岡健二他編（1993）『国語辞典・第一版』集英社

コーパス

『名大会話コーパス』（https://chunagon.ninjal.ac.jp/nuc/search）（最終閲覧日：2021 年 2 月 19 日）
藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房、pp43-72